

平成 15 年度第 2 回全学 F D（成績評価）の全体討議のまとめ

《情報処理科目》

同じ学科が複数の授業クラスに分かれている場合、それらの授業内容と成績評価基準に差異があるべきではない。

なお、同じ学科であっても、授業クラスによって学生のメンバーに対する態度や雰囲気が非常に異なっていることが、成績（到達度）の差異となる場合があるので、点数調整を機械的にやればよいということにはならない。

授業クラス間で点数分布に違いがあるとみなす判断基準の設定が難しい。明らかに違いがあると見なされる場合は、授業担当者間の協議が必要である。

情報処理基礎演習は、学生の専門性に応じた内容を盛り込んで入る授業がある。この場合、授業で用いるスライドやレポート課題が異なっているので、共通授業概要にそった成績評価基準を設定するのは非現実的である。

成績評価の公平性に対する学生の信頼が重要である。

レポートは模範解答を示す必要がある。レポートの点数は、学生にフィードバックするにこしたことはないが、授業担当者の義務にしなくてもいい。

情報処理科目の場合、問題の難易をランクづけできるので、各問題を解いた点数もランクづけしている。

プログラミング演習では、作成したプログラムが動くか動かないかというところに評価基準があり、この基準においては、授業担当者間の差が生じにくい。

ガイドラインを設けるとしても、レポートの考察とか説明に関する評価は授業担当者ごとの基準の違いが影響する。

情報処理科目Ⅱは、選択科目なので、各授業担当者が成績評価基準をシラバスで明示すればよい。

5段階の成績評価は、優秀な学生の意欲をさらに引き出すという効果が予想される。ただし、学生の事前の力や能力が反映されて、点数分布が二極化する可能性がある。

《基礎科学科目》

点数に授業理解の程度が反映されて入るわけではない。

成績評価基準を設ける前に、授業の内容と到達目標を学生に明示することが重要である。

科目（数学・物理学・化学など）によって、共通授業概要の位置づけが異なっている。例えば、共通の教科書を採用したとしても、その利用方法は、授業担当者によって異なっているので、成績評価基準を統一することは困難である。

専攻教育からの成績評価に関する問題提起を検討するかたちで、成績評価基準を設けるのが生産的である。

特に、配学の要件として点数を参照する学部の成績評価においては、公平性を考慮すべきである。

物理学のように、高校における物理の履修歴によって授業クラスを編成している場合、成績評価がダブルスタンダードになっている。

成績評価は基本的に授業担当者に一任し、点数分布に極端な偏りが生じた場合に、それを是正する

必要が生じる。

共通授業概要を踏まえているなら、授業内容の自由度を授業担当者に認めるのがいい。専攻教育からの要望を取り入れる方向で、シラバスに柔軟性をもたせるのが望ましい。

授業クラスが学科単位であり、かつ、学科によって学生の履修暦が異なるので、共通授業概要に基づく統一試験では学科間の差が授業クラス間の差として現れる。したがって、統一試験の必要はない。また、何通りかの共通授業概要を設けることが学生にとって意義があると思えない。

学習到達度再調査は有効である。しかし、現状として、これを活用する授業担当者とは活用しない授業担当者があり、このことが成績評価の基準に差異をもたらしている。

点数分布のピークが 60 点にある授業クラスが多いこと背景にはさまざまな要因がある。単位取得の容易な授業担当者があると認知されているのは問題だが、点数分布が正規分布になるようにすると学習意欲の低下が懸念される。また、年度間で、同じ学科の同じ授業科目の点数分布に差が生じる場合の対処は困難である。

出席は、成績評価に組み込まなくてもいいと思える。

《健康スポーツ科学科目》

共通授業概要、授業内容、成績評価について、毎年、常勤と非常勤の授業担当者を対象に、講習会と授業の検討会を行ってきているが、それでも、授業クラス間の点数分布には違いが生じている。

実習授業では、成績評価の基準として出席が関係している。出席と、レポート、実習ノート、測定の考察などとの配点比率を議論する必要がある。

実習授業においては、成績評価基準を明示する必要があり、体験が重要なので出席が 60 点、レポートが 20 点、実習ノートの整理とそれに関する感想、そして授業への取り組み姿勢を 20 点としている。

講義授業では共通テキストを用いているが、授業内容は授業担当者の専門分野に力点が置かれたものとならざるをえない。

講義授業の成績評価を適正なものとするために、試験問題を授業担当者間で公開し、互いに検討し合うとこと、また、複数回の試験によって成績評価を行うことなどが考えられる。

成績評価を合格と不合格の 2 段階にすることの是非は、今後の検討課題である。

《言語文化科目》

適正な成績評価とは、①公平性が保たれている、②成績評価が教育の終わりではない、③成績評価が教育成果を促す、④成績評価基準が明確に学生に公開されている、といったことによって実現する。

優・良・可の割合を決めておく相対評価は、授業科目間、授業担当者間に生じた点数分布の大きな違いを修正できるという利点がある。しかし、単純な相対評価は公平性を欠く恐れがある。優の出現比率を守る結果、実際の点数とのずれが生じる。例えば、トップ・クラスを構成し、インテンシブに学習する少人数の授業クラスでは、高い点数が多くなる。優・良・可の割合に幅をもたせるのがよい。

成績評価基準を明示するために、シラバスに具体的に掲載することが重要。

点数そのものを学生にフィードバックし、答案を開示することに意義がある。

英語の統一教科書を採用した授業クラスでは、成績評価の一部として統一試験の点数を取り入れること、及び、授業担当者間で試験問題の相互チェックを行うことを検討中である。

到達度評価再調査は、合（60点）・否だけにする。

専攻教育科目履修に支障が生じないための、温情としての、可評価はなくすべきである。

統一テキストを用いている中国語の授業では、講習会を開いて、到達目標を授業担当者間で確認し、試験問題を担当者間で公開し合っている。授業担当者間及び授業クラス間の点数分布に差異をなくするために、授業内容と到達目標を同じ授業科目間で統一することが重要である。

同じ学科や同じ学部の授業クラス間の熱意の違いの結果として生じている点数分布の異なりが、相対評価の導入によってごまかされてしまうので、相対評価は導入すべきでない。

統一テキストを用いた授業において統一テストを実施するには、問題のストックをたくさん用意しておくが必要になる。

検定試験の点数を九大の成績評価に換算する仕組みを活用する学生が増えることを期待している。

《個別教養科目》

個別教養科目は、授業担当者の個性と学生の関心が合致したところに成立している授業である。このことを前提にして適切な成績評価を検討すると、①個別教養科目に一律の成績評価基準として緩やかな相対評価を導入するのは不可能ではないが、馴染まない。学生の学部、学年も多様である。②試験にせよレポートによる成績評価にせよ、シラバスにその基準をより授業内容と具体的に関連づけて明示する必要がある。③授業において優秀な答案やレポートなどの例を紹介することにより、成績評価の基準を示す。④点数のフィードバックとして、学生からの求めがあるなら答案を見せながらの説明を行う。また、授業終了後もメールやクラス交流システムを用いたやり取りの場を確保する。⑤成績評価の基準の検討は重要であるが、肝心なのは学生に理解可能で知的好奇心を喚起する授業を行うことがもっと重要である。

成績評価が期末試験のみの授業クラスもあれば、複数回のレポートの累積による評価、また、学生個々の変容といったプロセスの評価もある。したがって、点数分布の形によって成績評価の適正が検討できるわけではない。

コア科目や専攻教育科目とのカリキュラム上の関連性を明確にすることが、成績評価の基準の検討に先立つと考える。

授業クラス間のあまりにも極端な点数分布の相違は、特に、進学振り分けや対外的評価対象となる場合に問題となるので、事後的な点数調整を実施すべきである。

成績評価についての学生の了解を得ることが重要である。この場合、履修者数に偏りが生じるといった問題が生じる可能性がある。

また、授業クラスの規模に応じた成績評価の傾向があると考えられる。優の数は、緩やかなV字型を描く。授業規模が小さいと情実が含まれ、100名以下の中規模だと授業担当者が細やかに評価を行い、大規模になると、評価の基準が粗くなるといったことは回避が困難である。

《コア教養科目A・B》

報告（分科会A）：

成績評価が適正であるとはどういうことかとなると、①授業の目的・目標に照らして成績評価の基準が適合しているか、②成績評価によって不利益をこうむる学生が出現しないようにする工夫とががあると考えた。

コア教養科目は、各学問の知識内容そのものの習得を主眼としておらず、各分野の知識見解による問題意識やものの見方・考え方などを理解することである。①共通授業概要はあるが、授業担当者の個性を反映した授業を目指しており、統一された基準で成績評価を行うということはコア教養科目の趣旨にそぐわない。②重要なことは成績評価ではなくて授業内容である。③進学査定と関連して、専攻教育科目におけるコア教養科目の位置づけを明確にする必要がある。GPAの導入や点数分布の調整は、専攻教育が考える重みづけとかかわってくる。④文系的6つの科目と理系的4つの科目とに統一した成績評価基準を設けるのはきわめて困難である。ただし、成績評価の方法を公開したうえで、公平性や適正さ検討することが重要である。⑤成績評価の確定後に点数分布の公開が望ましい。そして、同一の科目内において、点数分布をめぐる授業担当者間の検討が必要である。⑥学生の勉学意欲の向上を考えるなら、成績評価は合・否だけで構わないという意見と、段階評価が有効であるという意見とがあった。それから、小テストの評価を学生にフィードバックするなど日常的な評価の導入も考えられる。⑦総合大学ならではのコア教養科目の位置づけと学生の履修動機が明確になることによって、成績評価のあり方が見えてくると思える。

報告（分科会B）：

成績評価には、①学生の勉学への動機づけを高めるための到達度評価と、②進学評価のための管理的目的を目指すものがある。

管理的目的であっても、上位成績5%優秀者とか10%に対して表彰を与えとかいった形で、勉学への動機づけを高める。これは専攻教育できちんとやってほしい。成績考証がしっかりなされるなら、企業側の3年次生に対する青田刈りを緩和できる。

実質的には統一テストを行っている「人間と文化」でも、点数分布にばらつきが生じているということは、統一テストを導入しても、ばらつきが生じる可能性があることを物語っている。むしろ、授業クラス間で点数分布にばらつきがあるのが正常な状態だと考えることはできないだろうか。

同一科目間の点数分布のばらつきを解消する方法として、①同一科目の授業は、同一の授業担当者で開講する。あるいは、授業内容を完全に統一する。ただし、点数分布をそろえるために、授業内容を画一化するということになる。②画一化はせずに、アカウントビリティを高める。成績評価を具体的に明示する。③事後的に点数に数学的処理を施す。

徹底的に成績評価の公平性や客観性を高めようとする、コア教養科目の授業内容が変わってしまい趣とは逸脱した状態になってしまう。授業担当者としては、コア教養科目は担当者の専門性・個性を生かした授業であるがゆえに、工夫し試行錯誤している。コア教養科目が学問自体への知的好奇心を高めていくところに存在意味があるなら、問われるべきは、講義内容である。講義内容に即した形の成績評価があってしかるべきである。